

現地報告③

未来の人財育成に果たす 域学連携の役割

対馬市しまづくり推進部 市民協働・交通対策課 主任
(現・しまの力創生課 係長) 前田 剛



報告要旨

長崎県対馬市では地域の担い手の減少は深刻で、「地域の力」はマイナスの状態にある。そこで大切なのは「ひとづくり」。対馬市ではESD（持続可能な開発のための教育）の考え方にもとづき、学校教育と外からの人財の受け入れを通じ、担い手づくりに取り組んでいる。平成23年度に総務省の地域おこし協力隊の制度を活用した事業「島おこし協働隊」を開始した。そして「域学連携」により全国各地から年間500～600人の大学生を受け入れ、学生たちはさまざまな学びを通じて地域づくりに参画している。

参加者は都会生まれ・都会育ちだが、社会に出る前に実体験を通じて地域の問題を認識しようとする志の高い学生が多い。そして対馬で学んだ学生たちの中には、リピーターとして対馬に関わり続け、さらに移住して地域に貢献する者も輩出するまでに効果があらわれている。

目次

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 地域づくりはひとづくり | 4. 「域学連携」による地域づくり |
| 2. 持続可能な社会のづくり手の育成 | 5. 対馬のリピーターとなる学生たち |
| 3. 地域をつなぐ「島おこし協働隊」 | 6. 対馬で学んだ学生たちの意識の変化 |

1. 地域づくりはひとづくり

持続可能な社会を実現するために重要なことはふるさとづくりです。人間は自然環境や地域の支援なくしては暮らせません。同時に、意識ある行動なくして地域は守れません。

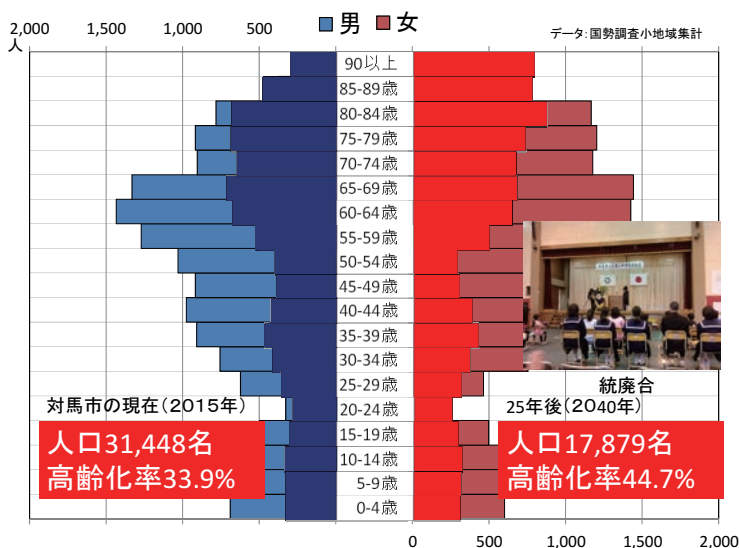
人が暮らしてゆくために仕事、なりわいをつくる。さらにグローバルな社会では、国内外のつながりを意識しながら行動する必要があります。私は根本的に大事なこととして、ひとづくりにフォーカスしてお話しします。

市長も説明いたしましたように、対馬の現状は非常に厳しいものがあります（図1）。私は学生時代から対馬に通い、移り住んで14年になります。地域の方々と地域づくりを実践

しながら感じることは、何かやりたいという思いは少なからずあっても、やる人財がない。自分の仕事や明日の糧をどうするか。地域づくりや環境保全のボランティアをやる余裕も体力もない。都市近郊のように学生やシルバーボランティアが来てくれるかということ、離島ならではのハンディキャップが大きい。結局何もやれずに地域が衰退し、125あるコミュニティの存続も非常に危うくなっています。

私たちは地域の方々とワークショップや座談会を行いますが、いいアイデアが出ててもその先に進めないのは、人の問題でつまづくからです。地域づくりはボランティアと捉えられがちですが、公務員も減り、リーダーとな

図1 対馬市の人口ピラミッド



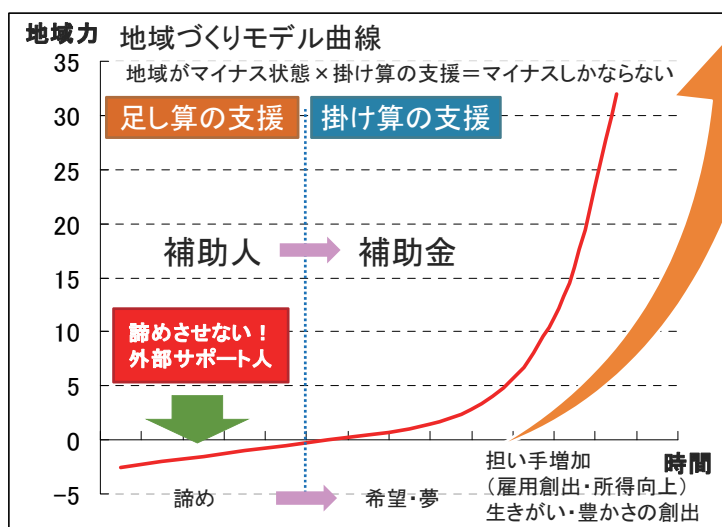
出典：
平成27年国勢調査をもとに報告者作成

る担い手もいません。私も地域の役員を10年務め、先日辞任した状況です。

いま、地域の力というものはマイナスの状況にあるのではないかと思います。新潟の稲垣文彦さんが「足し算の支援」という理論を提唱しています¹。地域がマイナスの状態で、何か掛け算的にイベントを開催したり、補助金をつけたりして地域をよくしようとして

も、マイナスに掛け算をしてもマイナスとなり、結局より悪くなるばかりである。それより地域に寄り添い、地域の力をまずプラスの状態に持っていく、諦めを夢や希望に変えることで補助金や諸制度が活きてくる。そういった転換が必要だと言っています(図2)。私が地域づくりを考えるとときの根本的な考え方は、これに即しています。

図2 足し算の支援(稲垣文彦理論)



出典：
稲垣(ほか)2014をもとに報告者作成

1 稲垣文彦氏は公益社団法人 中越防災安全推進機構 震災アーカイブス・メモリアルセンター長。2004年10月23日に発生した新潟県中越地震の復旧・復興に携わってきた。「足し算の支援」については、稲垣文彦(ほか)著 小田切徳美解題『震災復興が語る農山村再生：地域づくりの本質』コモンズ・2014年10月発行 を参照のこと。

2. 持続可能な社会のつくり手の育成

対馬市はひとづくり、つまり未来を担う子どもたちの育成を重要な政策として掲げています。私の前に報告された桑原先生も説明されたように、対馬市ではESDの考え方に即し、持続可能な社会のつくり手の育成に取り組んでいます。

対馬は自然環境や野生生物など、非常に教育資源に恵まれており、漂着ゴミといった課題までも教材になるわけです。

まず小学校では、楽しむ、感じる、知る、深める学習活動に取り組んでいます（図3）。中学生になると、自分たちが社会の参画者として提案できるまで発展します。平成29年には初めて子ども議会を開催し、市長も答弁に困るような質問もありました（図4）。対馬高校では、「ユネスコスクール教育」など「ESD対馬学」にも取り組んでおり、それぞれの教育ステージに合わせて支援しています。

人口減少、特に生産年齢人口、そして子どもたちの人口が急減していることが課題です。日本全体がそうですが、これから人口が増えることはありません。人口減少を前提に考えれば、人口の量より質を高める必要があります。過疎化の問題の本質はコミュニティの衰退であり、無縁社会化の進行です。人口減でも楽しく幸せに暮らせる環境を整えていく。地域の質を向上させることが大事です。

3. 地域をつなぐ「島おこし協働隊」

そういった点で、地域の子どもたちや地域のリーダーの力だけでは足りません。市長からの報告にもあったとおり、外から若者を招き入れる必要があるということで、前市長のもとで平成23年度に総務省の地域おこし協力隊の制度を活用しました。対馬市では「島おこし協働隊」と呼んでおりますが、外部人材が持つ都市部の感性や専門性を、島おこしの

図3 対馬市のひとづくり（小学校）



図4 対馬市のひとづくり（中学校）



出典：図3、図4とも対馬市しまの力創生課

新たな風として受け入れていこうという趣旨で、いま現役隊員が10名います。経験者の中には、対馬に残って起業したり、対馬の方と結婚して子どもをもうけたりして、引き続き頑張ってくれている状況です。

私が、平成23年度からこの事業に携わって、効果として一番大きいと実感していることは、地域内外のネットワーク化です。田舎では、人のつながりがありながら、しがらみがあって、結びつくべきところも結びつかないことがあります。

ある日突然、よそ者が入ってきて、仕事だけではなく、プライベートで消防団に入ったり、いろいろな特技や能力を活かして文化活

動に参加したりする中で「おまえが頑張っているなら俺も応援するよ、手伝うよ」ということに発展します。なおかつ、対馬島外に出て行った出身者たちも、何か故郷を捨てたような後ろめたさがあり、外から移住して頑張っている人がいると、その人となつがってふるさとを応援したいという気持ちになるわけです。地域社会で多様な人々が、網の目状に結び付いていく現象が見て取れました。

「島おこし協働隊」の人たちは地域内外をつなぐ架け橋、それぞれの思いをつなぐハブとなり、新しい文化や情報、人脈をもたらしてくれます。さらに彼らは非常に能力が高く、対馬市に財政負担をかけないよう、外から多額の資金を獲得して活性化のきっかけにします。外の人が頑張ると、地元の若者も黙っていらなくなります。去年、対馬高校の卒業式で、卒業生代表が「もっと地元の若者が立ち上がるべき」という答辞を読み、私は非常に感激しました。

4. 「域学連携」による地域づくり

それでも子ども、そして総人口は減少します。地域おこし協力隊も現在4,000人の隊員がいますが、全国各地で活用する自治体が増え、対馬市への応募は少なくなっています。現在の隊員を誘致するだけではなく、未来の人財を育てていくことも同時並行的に必要です。そこで域学連携、すなわち地域と大学の連携による地域づくりを進めています。

人口ピラミッド(図1)でも示したとおり、対馬には大学がないため、20歳前後の若者が極端に少ない。若者が少ないことで生じる地域の諸課題の解決を図り、未来の担い手、予備軍を育てていきたい。さらに地域づくりの実践活動と同時に、未来の地域おこしを行う

人財も育成しようと考え、域学連携に取り組んでいます。ないものねだりをせず、自分たちで人・物・情報・知恵・金の流れをつくるのが大切です。

大学連携には、産学官連携、産学連携など、いろいろな枠組みがありますが、域学連携は総務省が造語、提唱した概念です。

域学連携の特徴としては、主に大都市圏の学生が過疎地域や離島に出向いて活動しています。対馬市においても、主に大学生の人財育成、対馬にない活力を生かした地域づくりを推進するため、いままで諦めたり、もうできなくなっている地域活動の後押しを学生に行ってもらっています。

地域人財の育成として、学生との交流の中から地域の子どもたちや大人たちも成長していく。対馬の新たな付加価値を創造するために、全国的にも珍しいのですが、学生に特化した学術研究の奨励制度もあります。

地域では往々にして、調査研究が行われた後の成果が還元、共有されていないという課題があります。対馬市では、その成果をしっかりフィードバックしてもらおうと、「対馬学フォーラム」というポスター発表大会を12月に開催しました²。毎年50~60本集まりますが、これらの成果を介して、地域全体で持続可能な人財循環や産業づくりを推進していると考えています。

多くの都会生まれ、都会育ちの学生にとっては、地域に飛び込むきっかけや勇氣はないものです。対馬市では、大学の学びを基礎としながらも、地域と関わるきっかけづくりとして「島おこし実践塾」という短期実践合宿を実施しています。ここで現場に対するリアリティを持ってもらい、さらに自分の専門性を活かして現場で学びたいという学生に対し

2 「対馬学フォーラム」、ポスター発表大会の様態については、フィールドキャンパス対馬学舎ウェブサイト <http://fieldcampus.city.tsushima.nagasaki.jp/study/cat/> をご参照のこと(2018年4月20日閲覧)。

では、地域のニーズに応じて1か月程度、建築や医療、福祉、環境保全など、いろいろなテーマでプログラムを提供しています。もっと対馬のことを探求したい学生に対しては、学術研究の奨励補助がありますし、現場の当事者として一緒に活動したいという元気な学生に対しては、地域おこし協力隊などの制度で迎え入れています（図5）。

島おこし実践塾には毎年、北は北海道大学から南は琉球大学まで全国の学生が集まります。また、学生だけではなく社会人の学び直しということで、社会人の参加もあります。もう7回ほど続けまして、たくさんの塾生が育っています。

この塾は、地域づくりに飛び込むきっかけとして、まず最先端の地域づくりの理論を学んで、すぐ野外実習ということで実践をし、それをすぐみんなで分かち合うグループディスカッションをします。これは地元の高校生も入っています。それからみんなで発表して、

共有する。これをずっと繰り返して、最後は政策提言として市長の前でプレゼンテーションを行う枠組みです。

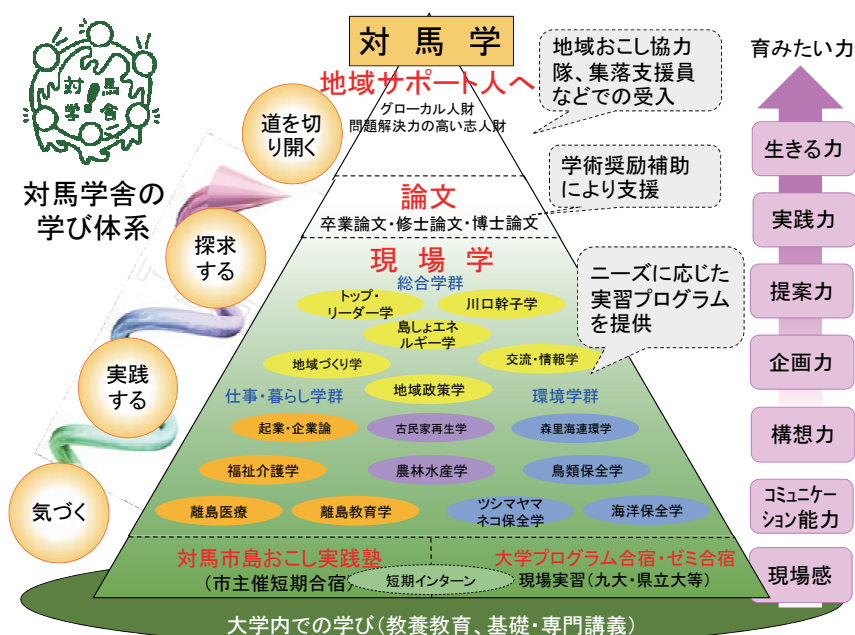
市長からも紹介がありました川口幹子さんが主任講師を務めています。彼女は学生に、持続可能な社会の実現を目指し、「過去に戻るのではなく、未来を創る」と教えています。

5. 対馬のリピーターとなる学生たち

塾生に対してアンケートをとって計量分析した結果があります（図6）。ほかのいろいろな専門分野、背景を持つ学生と共同生活しますから、異なる価値観に触れて非常に刺激を受けます。農林漁業体験など、これまで都会では絶対に経験できなかったような体験を通じて、なおかつ、地方が抱える諸問題に対して現実味を持つことで、この塾に参加した学生は、ほとんどリピーターとして対馬に来られる、といった効果があります。

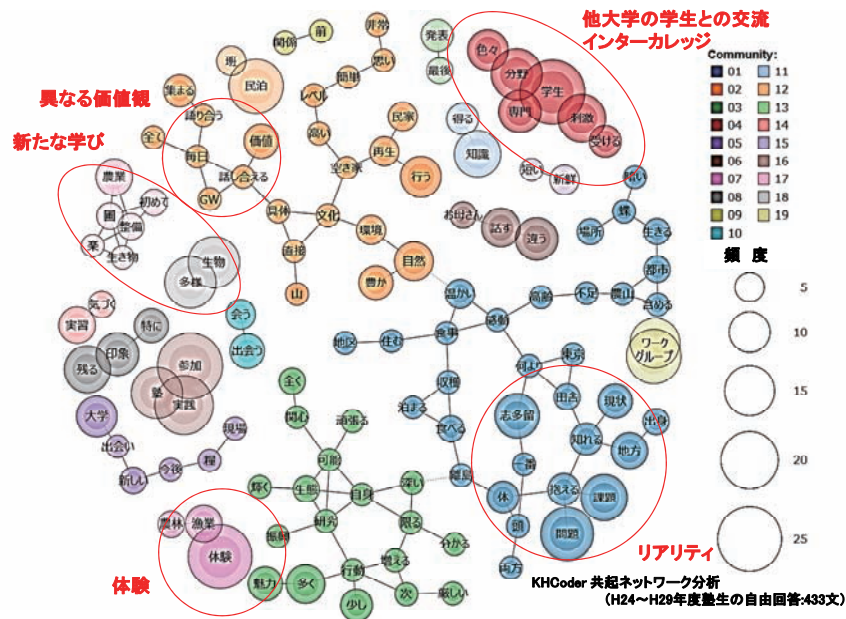
地域社会において、教育はいろいろな問題

図5 対馬における域学連携 学びの体系



出典：対馬市しまの力創生課

図6 塾生の学び



出典：平成24年度から29年度までの塾生アンケート結果をもとに報告者作成

を内包するので、教育以外の問題にも目がいくようになったという効果もあります。中長期間の学生実習では、伝統文化の保全や古民家の再生、あるいは、島には塾や家庭教師といった学校外教育のサービスがないので、大学生が子どもたちに勉強を教えたり、グリーンツーリズムを支援したり、学生の活力で地域づくりを応援してくれています。

国境離島であるという立地特性を活かし、国内だけでなく韓国の大学生もたくさん来ています。釜山外国語大学の学生は毎年3か月ほど対馬でインターンをしています。寮では学生たちと日韓交流をしています。韓国の学生の目上の方に対する敬意には感心させられました。例えば独居の高齢女性の家にホームステイをした学生は、その方が外出することができないことから、車椅子に乗せて、お祭りやスーパーに連れていきました。その方は学生と共同生活したことで、5歳くらい若返ったのではないかと感じています。若者と高齢者が触れ合うこと自体、本当に素晴らし

いことだと思います。

九州大学の学生とスポーツ交流した高齢女性は、生きていて一番幸せだったと言っていました。社会福祉実習に参加した東京の学生は、4月から対馬に移住し、社会福祉士として働きます。また、医療だけ見ていては人を助けられない、地域の課題も学びたいということで、医療系の学生も年間を通して少なからず来島しています。

後ほど基調講演をされる西村先生の出身校・京都大学の学生も域学連携に参加しています。対馬の女性とグループを結成し、独居高齢者の方への配食サービスを立ち上げた女子学生がいます。いままのまま対馬に移り住んで活動を続けています。

実績と成果ですが、先ほどの内藤理事長のお話のとおり年間約500~600人、それから研究者が100名ほど来ています。これは、高等教育機関がない島にとっては大きなインパクトです。学生の中には、地域おこし協力隊、あるいは休学して、蟻地獄にはまったかのよう

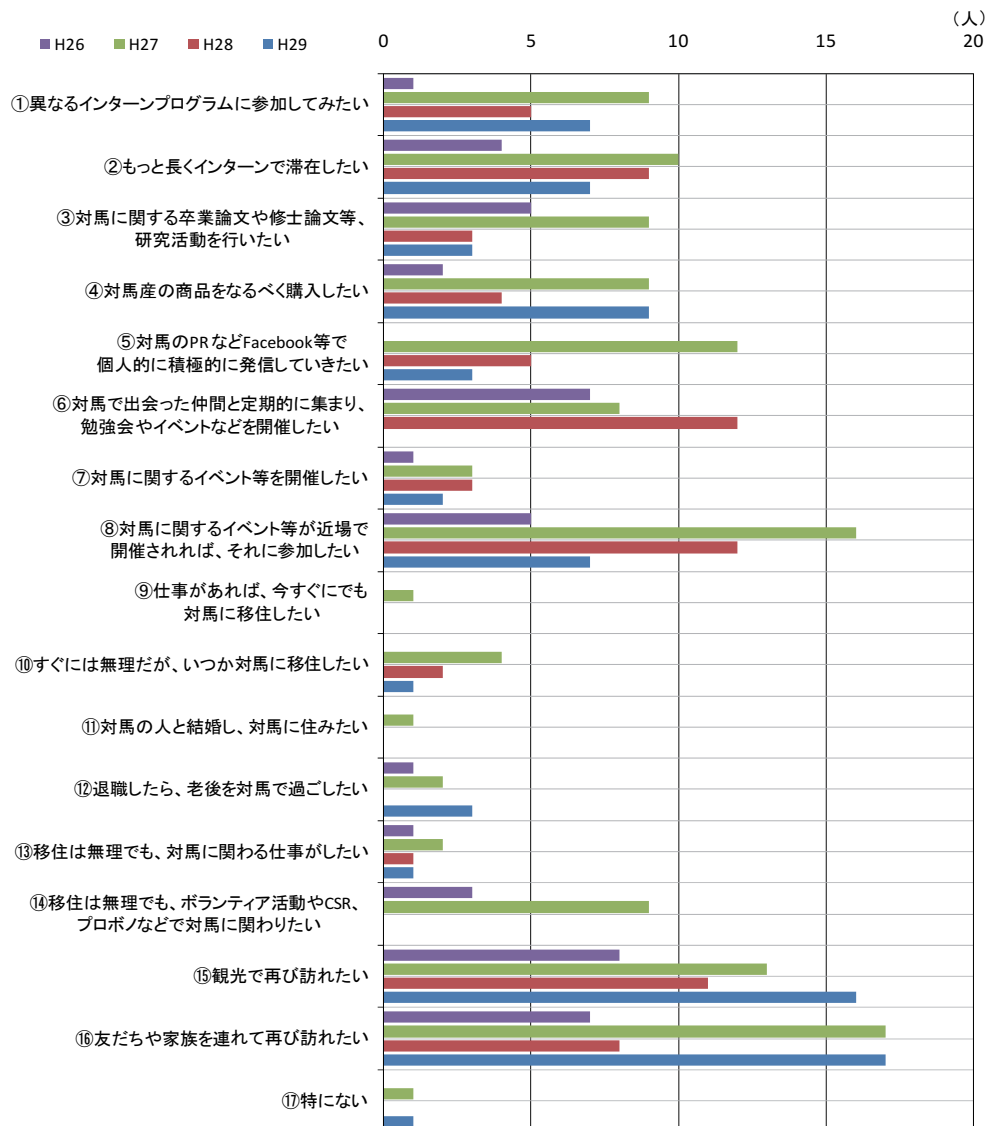
に何度でも対馬に通う現象が起きています。

域学連携は地方創生が叫ばれるいま、確実に人財育成、人財確保につながっていると実感しています。経験者に対し、今後の対馬への関わり方についてたずねる調査も続けます。卒業論文や修士論文を執筆するために

来たい、友だちや家族を連れて来たいなど、多様な希望があります（図7）。

いま、国は定住人口や交流人口だけでなく、関係人口³を増やすことが大事だと言っています。関係人口を増やす大きなポイントは、地域での深い学びにあります。地域の人々の

図7 域学連携参加後の、学生の対馬への関わり方意識



出典：平成26年度から29年度までの受入学生アンケート結果をもとに報告者作成

3 移住者としての「定住人口」や観光客などの「交流人口」とは別の、地域や地域の人々と多様に関わる者のこと。指出一正『ぼくらは地方で幸せを見つける：ソトコト流ローカル再生論』（ポプラ社・2016年12月発行）や田中輝美『関係人口をつくる：定住でも交流でもないローカルイノベーション』（木楽舎・2017年10月発行）などにより注目され、人口減少や高齢化の進む地方圏において、地域づくりの担い手となることが期待されている。

人情に触れることが、大きなリピート要因になっています。

6. 対馬で学んだ学生たちの意識の変化

学生の受け入れは大変です。学生たちの事故防止のため自動車の運転はさせられませんから、私たちは彼らを都度現場に送迎しています。なおかつ即効性のある事業でもありません。それでもなぜ、学生に対しここまで力を入れるのか。まず学生の専門性、地域に少ない20歳前後の新鮮な感性や外からの目線、そして若者のマンパワーに期待しています。私は学生に地域の実情をとにかく知ってもらうことが大切だと思います。日本全国に学生は280万人いますが、7割は三大都市圏に偏在しています。つまり学生の多くが都会生まれ・都会育ちの若者で、いわゆる地域に関するイメージとリアリティのギャップがかなり開いているということです。

学生たちに参加動機をたずねると、「大学の授業や報道で、少子高齢化や地方創生といわれてもピンとこない。実情を知らないので、実社会に出る前にそういう側面を見ておかなければ駄目なんだ」という、志の高い学生が多い。対馬で学ぶことは、対馬のためだけではなく、これからの日本や地域社会、離島全体を維持していくうえでは大変重要です。東京一極集中を是正して地方への人口還流の流れをつくり、地域づくりの人財確保に努めようとする国の施策を受け、さらに域学連携に力を入れていきたいと思っています。

対馬で学生たちはいろいろな学びを得て、感想を持ちます。代表的なものを挙げると、「少子高齢化や地方創生、環境問題というのは、都市生活や大学の授業だけでは何か他人事だったが、リアリティをもって学ぶことで身近に感じられるようになった」これは素晴らしい意識の変化です。

対馬での学びが人生設計にどう影響したか。「いままで都会で働くことしか考えていなかったが、他の選択肢や可能性があることを知った。」「何となく地域と関わりたかったが、どのような立場で関わるのかが分からなかった。それをしっかりと見つめて、知ることができた」これも素晴らしい感想です。

「卒業後すぐ地方に移住したかったが、自分は何もできないことに気付いた。何かスキルを身に付けないといけないので、自分は企業で働いて培ったスキルや経験を、将来 I ターン移住して地域のために役立てたい」そういった気付きも非常に大きいと思います。

例えば、東京大学出身の実践塾受講者がいました。彼は都会生まれ・都会育ちの学生ですが、地方創生の仕事をしたいと、国家公務員を希望していました。東京で地方創生を考えると、「U I ターンなど移住者を増やせば何とかなる」という都会的な視点しか持っていない感でしたが、実際地域に入っているいろいろなことを見ると、それだけでは駄目だと気付いたそうです。彼は4月から国家公務員になります。これから法律や予算をつくる立場にある若者が、対馬をはじめ地域の現場でリアリティを持てたことは、対馬のためだけではなく、これからの日本社会を支えていく上では非常に大事な学びだったと思います。

年間500人ほどの学生が来島していますが、毎年2～3名が対馬に移住しています。対馬で育った学生が、対馬に限らず国内外で活躍してくれる。あるいはボーダレスな社会ですから、外からでも応援できることはたくさんあります。そういった志のある人財を対馬でもっと育てていきたいです。

この場にも大学関係者の方もたくさんいらっしゃいます。対馬市から往復交通費は出せませんが、ぜひ、対馬にたくさんの学生を送り込んでいただければと思います。